

「生きて笑ってごはんを食べてくればいい」

ー障害児を育てる母親の「しあわせ」ー

○ 武蔵野大学通信教育部／龍谷大学大学院博士後期課程研究生 前廣美保（会員番号 8308）

キーワード：しあわせ・障害・受け入れる

1. 研究目的

本研究では、障害児を育てている母親への聞き取りを通して、障害児を育てる人生において、「困難」「苦労」を感じた体験が、どのように「しあわせ」「喜び」に結びついたのかを探る。「障害」は不幸ではないと主張するための視座として、障害児を育てている母親に注目した。

障害児の子育ては、一般的には困難が多いとされる。また、障害は「不幸」だとみられることもある。その一方で、障害児を授かっても、子育てを楽しみ、自己肯定感を高めながら暮らす母親も存在する。福祉の歴史では、障害者の家族と当事者がその困難な状況から運動を起こして、居場所や仕事、支援制度を作り出してきた。そのような取り組みや挑戦が「達成感」や「仲間意識」「自己肯定感」「自己効力感」などの獲得につながると考えられる。

なお、本論では肯定的な感情を指す「しあわせ」を漢字の「幸せ」ではなくひらがなを用いる。日本語における「しあわせ」という語の意味の変遷を踏まえて、母親の語りを考察する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、障害児を育てることに「しあわせ」を感じている個人への聞き取り調査をライフストーリー分析の手法を参考にして考察する。聞き取り面接は、できるだけ自然な会話を大事にしたナラティブアプローチを土台として、事前に5つの質問項目を提示した半構造化面接に近い手法で行われた。

調査協力者となった障害児を育てている母親は、障害者に関わる団体やイベント等を通して知り合い、研究の趣旨を理解してもらったうえで、主体的に協力への同意を得た。また、主観的幸福感の高さを、オックスフォード式主観的幸福感尺度（Hills, P & Argyle, M 2002）¹を用いて確認している。

3. 倫理的配慮

本報告のAさんを含む複数の方々への聞き取り調査は、2019年2月に龍谷大学大学院の「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の審査を経て承認を得ている（2018-29）。

4. 研究結果

10代で親元を飛び出したことが人生の「原点」とであると語るAさんは、「障害児の母」という役割を予期せずに与えられても「私」が育てると肚を決めている。Aさんには、主体的に生きようとする姿勢が「原点」であるため、娘に「障害」があることと、それに付随する経験も、主体的な生き方の選択によって、「生きて笑ってごはんを食べてくればいい」という「しあわせ」に結び付いていることが明らかになった。

他者からは「困難」「苦労」「不幸」のように見えるできごとであっても、その当事者にとっては全く違うものとして受け取られる。肯定的な意味で「しあわせ」を感じるためには、その判断の軸が当事者自身のものであるかどうかが最重要である。「自己決定の機会が多かった人の方が、より『しあわせ』を感じる力が高い」（西村、八木：2018ⁱⁱ）と報告されているように、与えられたものを、どのように受け取るのかを主体的に決めることが「しあわせ」につながるといえる。自分の人生の決断において、常に主体的に決めることを意識している人は、一見「しあわせ」に見える状況を経験したとしても、そこから自ら肯定的な意味として「しあわせ」を感じる力を獲得することができる。

Aさんが人生において主体的な選択を実行したきた力が、一般的に「不安」「困難」「不幸」とされる障害児の子育てを、ありのままに受け入れる力となり、「生きて笑ってごはんを食べ」ていることが「しあわせ」だと言い切る確信につながっている。

5. 考察

本論では、障害児を育てる母親であるAさんの人生の語りから「しあわせ」とは何かを考えた。「しあわせ」とは、天からのめぐりあわせを自分自身がどのように受け入れるのかによって決まるものである（前廣 2022）ⁱⁱⁱ。ひとつに固定できる概念ではないが、Aさんが人生経験に基づく言葉で「生きて笑ってごはん食べてくれていればそれでいい」と断言したものは、「あたりまえの日常」に存在するひとつの「しあわせ」である。

今後は、障害を持つ子どもを育てる母親に聞き取りを重ねて、「しあわせ」を表す別の視点、異なる表現を明らかにする。本研究が障害の有無に関わらず、子育てで困難を経験する母親が自然体で主体的に暮らすための一助となることをめざす。

参考文献

-
- ⁱ Hills, P & Argyle, M “The Oxford Happiness Questionnaire: a compact scale for the measurement of psychological well-being” [Personality and Individual Differences] 33 (2002) 1073–1082
- ⁱⁱ 西村和男, 八木匡 (2018)「幸福感と自己決定－日本における実証研究」RIETI Discussion Paper Series 18-J-026 独立行政法人経済産業研究所 pp.1–31
- ⁱⁱⁱ 前廣美保 (2022)「日本語における『しあわせ』概念の変遷」日本仏教社会福祉学会年報 52号 掲載準備中